



## 自粛と我慢の1年半で感染は収束せず。東京五輪強行！

東京都の新規感染者は1,000人を超えました。「国民の命と健康が最優先」と言いながら「国民の命と健康を犠牲にして」緊急事態宣言下において、五輪開催に突き進みました。新型コロナ対策の「最大の切り札」とするワクチンは、「弾切れ」で大混乱を招いています。政府の新型コロナ対策は、1年半を過ぎても機能せず、事態は悪化しています。終わりの見えない自粛生活に、国民のストレスは頂点に達しています。

## 満身創痍の東京五輪

政府は五輪開催を目前に緊急事態宣言を発出しました。「宣言」の目的は感染抑制です。五輪の開催強行は感染拡大推進になります。五輪を安全に開催する為には、感染抑制に全力を挙げるべきでした。しかしこの1年半、検査の抑制や杜撰な水際対策、早すぎる緊急事態宣言の解除などを続けてきた結果、首都圏ではインド変異株主因の感染が再拡大しています。新型コロナ感染「第5波」の到来です。

## 無防備の国民を守るために五輪は中止を

我が国のワクチン接種率は先進国で最低レベルです。またワクチン不足により、多くの自治体で接種予約が停止しています。一方、五輪選手団は次々と来日していますが、感染者が続出しています。五輪入国者と一般市民を完全隔離するはずの「バブル方式」がまったく機能せず「パンク」状態です。「無防備の国民の命と健康」は危機に瀕しており、東京五輪は中止すべきでした。

## 非科学的な政治の繰り返しでコロナに敗戦

我が国のコロナ対策は失敗の連続です。右表の菅総理の「非科学的」な発言はそのことを如実に示しています。限定的なPCR検査の実施、泥縄式のワクチン接種と緊急事態宣言下における無観客での五輪開催は「コロナに打ち負けた証し」と言えます。コロナに敗戦です。

## 新型コロナを巡る菅総理の発言

発言	結果
爆発的な感染は絶対に防ぎ、国民の命と健康を守り抜く (2020年10月26日、所信表明演説)	(1月) 「第3波」東京都などに2度目の緊急事態宣言
1か月後には必ず事態を改善させる (2021年1月7日、記者会見)	(2月) 宣言を解除できず1か月間延長
1か月で(宣言解除を)できなかった責任はすべて私が背負う (2021年2月2日、参議院議院運営委員会)	(3月) 宣言を再び延長
感染拡大を二度と起こしてはいけない。その決意を自らにも言い聞かせている (2021年3月18日、記者会見)	(4月) 「第4波」東京都などに3度目の緊急事態宣言
ゴールデンウィークという機会を捉え、対策を短期間で集中的に実施しウイルスを抑え込む (2021年4月23日、記者会見)	(5月) 宣言を2回延長
何より警戒すべきは大きなりバウンドを起こさないこと。東京五輪では、世界が団結してコロナという難局を乗り越えていくことを発信したい (2021年6月17日、記者会見)	(7月) 東京都に4度目の緊急事態宣言を決定。五輪は緊急事態宣言下で開催へ

東京新聞から

## 新型コロナ濃厚接触者への対応の違い

五輪・パラ選手ら	一般国民
①個室などに移動し、他の人との動線を分ける	陰性でも、やむを得ない場合を除いて14日間外出自粛
②毎日の検査結果が陰性で、医師の許可があれば練習可能	
③他の出場者が了解すれば、試合への出場を認めることも	

## 国民は二の次「誰のため」のオリンピックか

下表の新型コロナ濃厚接触者への対応にみられるように、五輪・パラ選手と国民の対応に差があります。国民の安全は二の次になっています。

国内へのウイルス流入を食い止めるためには、PCR検査を実施して厳重に選手や関係者を調べ、濃厚接触者についても14日間の隔離を徹底すべきでした。しかし現状は、抗原検査を実施、濃厚接触者についてもフリーパスで国内移動を許しています。ウガンダ選手団の来日は、五輪を優先した不完全な水際対策と濃厚接触者追跡を浮き彫りにしました。

## 「日本は先進国」とは名ばかり

ワクチン接種率を国別にみると、接種率上位国はイスラエルを筆頭に英国、米国次いで中東の産油国など富める国々が占めています。

日本はワクチン接種率はG7で最下位になっています。政府は接種率を上げるために躍起になっていますが、空回りしています。ワクチン開発に乗り遅れ、ワクチン争奪戦で惨敗しています。新型コロナは日本の国力の低下を浮き彫りにしました。もはや「日本は先進国」とは名ばかりです。

## 無計画で泥縄→五輪に間に合わず

菅首相は7月17日、ワクチン「10～11月の早い時期に」希望者完了と目標を前倒しました。平井鳥取県知事は「戦略的に供給することを考えてもらわないと、なかなか実現は難しいかもしれない」と指摘。供給量や供給スケジュールを早期に示すよう要請しました。杜撰な接種計画と自治体などの接種態勢を考慮せずに「打つことを急いだ」結果、ワクチン供給が需要に追いつかなくなり、五輪にも間に合いませんでした。

## ワクチン供給の見通しを早急に

現在、感染が急増している若い世代への対策も遅れています。「今打ちたい」という若い世代の要望には全く応えられていません。自治体間で接種速度に差が出ていることも浮き彫りになっており、政府には自治体が計画を組めるワクチン供給の見通しを示すことが求められています。

## ワクチン接種の混乱・迷走の責任は政府

県内の市町村別のワクチン接種率は町村レベルは高く、人口が密の市部は低い傾向にあります(県公表せず)。新型コロナは都市部から地方へ人流によって感染者を拡大していることは明白です。県内感染者数も人口の多い4市で約67%を占めています。

ワクチンは人口比で配分していますが、接種率に格差が生じています。ワクチンを「人口の密な都市」に集中配分・接種するなど戦略的、合理的な接種を進めるべきでした。ワクチン接種の混乱は政府の機能不全、無政府状態を浮き彫りにしました。

## 「マスクと10万円」で財政支出は世界第2位

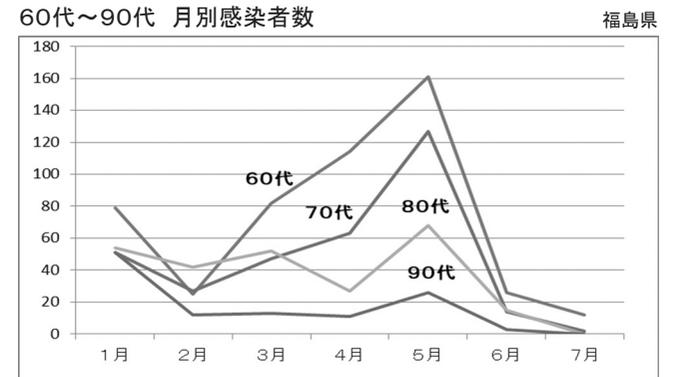
政府のコロナ対策は安倍政権時代に一人10万円の定額給付とマスク2枚を配っただけで、国民の手に確実に届いた支援策は皆無でした。

財政出動の額だけ見ると、日本は米国の約400兆円に次いで2番目で、約200兆円規模の財政支出となっています。

## 財政支出のほとんどはGoToトラベル

アメリカが失業給付の拡充や中小企業への融資、現金給付を3回実施しているのに対し、日本はGoToトラベル延長費用が主で、それも途中で感染拡大の要因になっているとして打ち切られ、国民生活の救済には回らず大部分は大企業が吸収しました。

## ワクチンで高齢者の感染大幅激減



上図は本県の高齢者の感染者数の推移です。6・7月は高齢者の感染者数が大幅に減少しており、ワクチン接種と福祉施設等のPCR検査拡充が要因と思われます。イスラエル、英国はワクチン接種が進んでいますが、感染も拡大中です。

## 福島県の津波対策は万全だったのか

東日本大震災・原発事故から10年が経過しました。福島第一原発事故は住民訴訟によって国や東電に責任があることを裁判所が認めました。

一方、福島県は事故を未然に防ぐ対策（特に津波対策）を国や東電に求めてきたのか、問われています。

## 茨城県 対策を求め3.11事故を回避

茨城県は、日本原電 東海第二原発における津波対策として、事故後危機管理室長が「体験談」として以下の3点を挙げ、全電源喪失を回避できたと検証しています。

- ①2007年3月に延宝房総沖津波地震（1677年）を想定し「茨城県津波浸水想定区域図」（津波ハザードマップ）を作成。
- ②原子力安全対策課が、日本原電に取水ポンプの浸水防止の側壁嵩上げ工事を要請。
- ③日本原電が県の要請を受け入れ、自主保安の観点から、かさ上げ工事を実施に移した。

## 首都圏の電力供給を心配した対策

1995年に発生した阪神・淡路大震災を契機に、福島県は1995年から3年かけて「地震津波被害想定調査」を実施、1998年3月報告書を公表しました。「調査」概要版には、原子力発電所については「国が耐震安全性について確認しているので、地震によって原子力災害が発生することはない」と全幅の信頼をおいています。一方、「発電・送電が停止した場合や送電設備が被災した場合に、首都圏への電力供給が停止となり、国内外の社会経済活動が混乱が想定される。」と首都圏への電力供給停止による経済活動の混乱を心配しています。

## 事故を回避できた茨城県と宮城県の違いは

茨城県と宮城県は対策を受け入れられ、福島県は対策を受け入れられず、というのが原発事故の顛末です。福島県には何が欠けていたのか、検証すべきです。

## 想定超の津波予測の対策求めたか不明

「調査」概要版に載っていない「参考地震」は1677年の延宝房総沖地震が福島沖で発生したと仮定して計算した津波（M8.0）を想定していました。「原発と大津波警告を葬った人々」添田孝史 岩波新書によれば「福島第一原発の港湾入口では高さが5m、1号機と5号機の間付近の岸壁で5.8mという予測。非常用海水ポンプなどが設置された敷地の高さ4mを超えると報告書に明記されていた」とあります。この当時、県は想定を超える津波が来ることを予測していました。県は東電に対策を求めたかどうかは不明です。

## 県、日本海溝の津波地震は想定せず

2007年7月に公表した津波浸水想定区域図等調査は宮城県沖地震、明治三陸タイプ地震、福島県高角断層地震（1938年福島県沖）を想定地震として設定しています。想定地震は、中央防災会議の設定を取り入れ、県が選定しました。この当時、文科省地震調査研究推進本部（地震本部）の長期評価や7省庁手引きでは、日本海溝の津波地震を予測していました。

## 津波対策を回避するためか？

2002年7月に地震本部が公表した長期評価は「巨大津波を引き起こす『津波地震』と呼ばれる地震が30年以内に20%の確率で発生」し、1896年に発生した明治三陸沖地震と同等の地震が日本海溝のどこでも（福島県沖、茨城沖でも）起きうると予測しています。東電設計は2007年11月、福島第一の津波の最高水位は7.7mと算出。東電の津波想定5.7mを大きく上回る結果になっています。福島県が「日本海溝型地震」を検討対象に含めなかったのは津波対策を回避することが念頭にあったのでは、という疑問が残ります。

津波地震とは、地震動から求められるマグニチュードの大きさに比して、大きな津波が発生する地震のことで、1972年に地震学者の金森博雄氏が定義しました。

## 県、東電に津波対策を2度求める

福島県は東電に津波対策を2度求めていたことがジャーナリスト木野龍逸氏による開示文書で明らかになっています。1回目は2008年5月、東電が原子力安全・保安院に提出した耐震バックチェック中間報告に関して「福島県沖プレート間地震M7.9の想定は過小評価ではないか」と質問しています。この質問に対する東電の回答は残っていません。2回目は同年12月、東電に対し津波を含む耐震想定の見直しを急ぐべきと要望してます。

## 県、津波対策を求める→東電は回答せず

東電は当初、2008年6月までに、津波評価を含むすべての結果を報告するはずでした。2007年12月に、東電はこの報告期限を延長しました。理由は、2007年7月に発生した新潟県中越沖地震で揺れが想定を超えたため、耐震バックチェックに反映するというものでした。県は「中越沖地震と関係ない部分は、すでに報告書はまとまっているのではないか」「津波、周辺斜面の安定性など、中越沖地震に関わらない部分は出せるのではないか」と申し入れをしましたが、回答はありませんでした。

## 県も「安全神話」にどっぷり

県議会の津波対策の議論について、2000年以降の議事録には、2005年に共産党長谷部議員「津波による冷却取水への影響」、2007年に共産党宮川議員「津波引き波対策（冷却水取り入れ）」と二人の質問がありました。県の答弁はなおざりで、長谷部議員へは「第一原発は最高水位5.7mと想定、海水の取水の影響は問題ない」。宮川議員へは「チリ地震規模の水位低下を想定して評価」と「安全神話の信者」のような答弁でした。

## 福島県は無為無策

2007年当時は東北電力は湾を浚渫、中部電力は取水管を沖まで延長する対策を講じています。福島県は東電に対策を求めませんでした。

福島県沖の津波地震の国等の態度

年	国等	福島沖の津波地震
1998年3月	七省庁手引き	想定する
2002年2月	土木学会手法	想定から除外
2002年7月	地震本部長期評価	想定する
2004年2月	中央防災会議	想定から除外
2008年7月	東京電力	想定を先延ばし
2010年11月	原子力安全基盤機構	想定する
2010年12月	土木学会手法	想定する

## 現在も緊急事態宣言継続中

国などの津波地震への対応は上図の通りです。東電は土木学会手法による対策、福島県は中央防災会議による津波浸水想定調査による対策です。その結果、津波対策をおろそかにした東電によって原発の全電源喪失を誘発、現在も緊急事態宣言の中での生活を余儀なくされています。

## 想定外津波は「ウソ」

原発事故は裁判所が認めたように「人災」です。地震本部等が算出した津波高を東電の都合で津波対策を先送り（2008年7月）したことにあります。東電設計は2008年3月に15.7mの津波襲来と予測していました。東電は原子力安全・保安院に「貞観地震の津波を想定すると9mになる。これに2～3割に余裕を上乗せする対策が不可欠」と報告しています（2009年9月）。2011年3月7日に東電は「推本の長期計画に基づくと、敷地を上回る15.7mの津波が予測される」と説明しています。

## 津波対策を求めていたら事故は未然に

福島第一原子力発電所3号機のプルサーマル計画は、津波評価を含む耐震バックチェック（再評価）の実施が不可欠でしたが、津波の評価は実施せずにプルサーマル計画を実施に移しました。2010年4月、県の担当者は資源エネルギー庁を訪れ、以下のようなやり取りを行っています。資源エネルギー庁「津波などは含まない評価でいいんですね」県「国で判断してほしい」と繰り返す（東電原発裁判添田孝史著・岩波新書）。この時に、県は県民の安全を放棄しました。2008年、東電に2回津波の想定見直しを催促していたとは思えない豹変です。この時、県が津波評価を求めていたら事故は未然に防げた可能性も。しかし、3.11まで時間はわずかでした。